広島大学　大学教育研究センター　大学論集
第29集（1998年度）1999年３月発行：133―149

現代日本の大学における学生の多様化と導入教育の重要性について

――“SPS”から“SD”へ――

加　澤　恒　雄

目　次

緒言―問題の所在
Ⅰ．“SPS”としてのフレッシュマン・オリエンテーション
Ⅱ．広島工大のその後の「オリ・ゼミ」実施経過
Ⅲ．カリキュラム改革と「総合ゼミナール」科目の新設
Ⅳ．「総合ゼミナール」の実施とその経過
　―“SPS”から“SD”へ
Ⅴ．人間形成空間としてのキャンパス
結語―今後の課題

現代日本の大学における学生の多様化と導入教育の重要性について

――“SPS”から“SD”へ――

加　澤　恒　雄*

緒言――問題の所在

約10余年前に，筆者は，大学教育における“SPS”（student personnel services）の重要性について考察し，ある学会誌に論文を発表した[1]。当時の状況と今回この問題について再論することになった経過を概述しておきたい。当時の1980年代後半は，大学の大衆化がより一層進んだ時代であるが，ここで，「大衆化の軌跡」[2]を確認してみると，該当年齢人口（18～22歳）に占める高等教育機関在学者の割合である「高等教育在学率」は，1950年に6.1%であったが，1960年以降に急上昇し，15.7%と初めて15%を突破したのは1966年であった。こうして有名な，トロウ（Martin A. Trow）の3段階発展説（phaseology）におけるマス段階――在学率が15～50%に達する段階――に達した後，1978年にはそれまでの最高である34.2%（性別では男子44.4%，女子23.5%）にまで達した。

筆者が執筆したのは，こうした事態がさらに進み大学の大衆化が成熟しつつある状況の中で，大学のキャンパスにおける次のような学生の不適応現象が顕著化したことへの危機意識に基づくものであった。すなわち，不適応シンドロームとして挙げられるのは，1）中途退学者の増加　2）連続的な留年者数の増加　3）学習意欲の喪失による退学者の増加　4）さまざまな精神疾患に罹病する学生の増加，さらには，5）自殺する学生の増加，等々である。かつて「5月病」と呼ばれた大学入学による目標達成の安堵感と目標喪失に起因する一時的な虚脱状態が，大学在学中ずうっと継続するアパシー学生が出現し，「四無主義」（無気力，無感動，無関心，無責任）として特徴づけられる「スチューデント・アパシー」が指摘[3]され始めたのであった。

さて，現在においても学生の不適応現象の傾向は，慢性的に継続していると言わねばならないが，大学と学生を取り巻く状況の変化に応じて，さらに新たな諸問題も生起している。たとえば，1）授業中の私語多発化現象であり，その対応策はいかにあるべきか。2）入試方法の多様化に因る学生の多様化の進行にどのように対応すべきか。3）とくに，低学力者や基礎的な科目の未履修者への指導をいかに行うか，すなわちリメディアル教育の問題，等々である。

あるいはまた，1991年に発効した改訂大学設置基準の大綱化を契機として，日本の大学は，国・公・私立を問わず大改革の時代に突入した。とくに大学の教育機能の強化が焦点となり，4）教育の改善を志向する「教育」改革が課題となっている。それから，5）日本社会のかつてない大不況

* 広島大学大学教育研究センター学外研究員／広島工業大学工学部教授

下での学生の就職問題と，就職協定廃止下における学生の指導の在り方も大きな問題の１つとなっている。

さて，以上挙げたような大学と学生が直面している困難な問題状況の中で，われわれ大学教育に携わる者は，日本の将来を担う若者たちの成長・育成のためにベストを尽くして取り組まねばならないのである。本稿では，「フレッシュマン・オリエンテーション再論」の形で，“SPS”からさらに一歩進んで“SD”（student development：学生の資質開発）の問題についても論じてみたい。

Ⅰ．“SPS”としてのフレッシュマン・オリエンテーション

Ⅰ－１．フレッシュマン・オリエンテーションの起源

“freshman orientation”の起源は，アメリカの大学である。J.C. ノードの調査[4]によると，1888年に，Boston 大学と Brown 大学で新入学生へのオリエンテーションが行われたのが最初である，と報告されている。これらに続いて，1900年に Iowa 州立大学が，さらに1911年には Stanford 大学と Michigan 大学が，そして，1912年に Illinois 大学が“freshman orientation”を実施したのに続いて，その後，全米の大半の大学がこれを取り入れ実施するようになった。つまり，アメリカの大学における freshman orientation 実施の歴史は，110年にもなるわけである。

因みに，日本の大学がアメリカの大学から学んでこのオリエンテーション制度を導入・実施したのは，1960年代に入ってからである。たとえば，1961年に九州大学が，それに続いて1966年に上智大学が，新入学生に対するオリエンテーションを実施している[5]。すなわち，日本の大学におけるフレッシュマン・オリエンテーションの歴史はまだ40年にも満たないわけで，アメリカの大学のそれと比べれば，まだまだ蓄積が不十分であると言わねばならない。

Ⅰ－２．フレッシュマン・オリエンテーションの定義

ここで，freshman orientation の原義について言及しておきたい。“orientation”の語義について述べると，一般的な用法では「方角を決定する過程」(the process of determining bearings) であり，また，“orientation”は，語源的には，名詞の“orient”（東方，光の来る方角）からできた動詞の“orientate”（方向づける）を再び名詞化したものである。したがって，その意味は，「新しい夜明けに際して，東方に向きを定めること」(“Turning toward the East, facing a new dawn.”) であり，これが高等教育の分野とくに“college life”に転用されて，フレッシュマン・オリエンテーションとは，「新入学生たちが大学という新しい環境にできるだけ早く慣れて，大学生活に適応することができるように，彼らに対して指導・援助し，方向づけを行うこと」を意味するようになったのである[6]。

Ⅱ．広島工大のその後の「オリ・ゼミ」実施経過

筆者は前述した論文で，昭和61年度までに実施された広島工大のオリエンテーション・セミナー

（通称「オリ・ゼミ」）について，既に詳細に報告・論述した。本稿では，それ以降のオリ・ゼミの変遷について概観し，今後の課題について考察するのが主旨であるが，その前にまず，従来のオリ・ゼミについて総括しておきたい。

Ⅱ－1．広島工大におけるオリ・ゼミ実施20年

広島工大では，1969年（昭和44年）の春に，第1回目のオリ・ゼミを実施して以来，その方法や内容あるいは実施場所に変更があったとは言え，現在まで1度も中断することなく，毎年4月にオリ・ゼミを開催してきた。広島工大が全国の大学の中でも比較的に早期に，1960年代後半からフレッシュマン・オリエンテーションを開始し，これを継続し，然るべき成果を上げることができた成功の要因の1つは，何と言っても広島工大専用の施設・設備に恵まれていたことであろう。

そこで，この施設等について，その概容を紹介しておく。広島工大には，広島市西部に在るアクセスの至便なメイン・キャンパスの他に，次の2つのサブ・キャンパスが有る。1つは，平和公園のすぐ近くで広島市の中心部に位置する「広島校舎」で，ここには各種の国際学会や同窓会用の会議室や結婚式場，各種のパーティができる宴会場などが設置されており，これらの利用に関しては，学外者にも開放されている。もう1つは，主として宿泊オリエンテーションあるいは教職員および学生の研修，保養を目的として設けられた「沼田キャンパス」である。これは広島市西部丘陵の緑豊かな山間部に位置し，メイン・キャンパスから車で約30分で行くことができる。

さて，この沼田キャンパスの概要[7]であるが，施設・設備としては次のようなものが有る。1）4階建の「知育館」：大・中・小の講義室と測量研究室，土質研究室等が設けられている。2）平屋建の「徳育館」：講演や読書のために使われている。3）「体育館」：さまざまな道具や器具が備えつけられており，バレーボール，バスケットボール，卓球やハンドボール，バドミントン等が可能である。4）3階建の「生活棟」：2棟から成り，全部で235人宿泊できる。3つの浴場と大食堂がある。5）3階建のクラフトセンター：陶芸，木工，そして絵画制作ができる。6）大・小2つの「馬場」ならびに馬場管理棟：ここには乗馬指導教師が管理人として常住している。7）7面のテニスコート。8）広大な自然林に囲まれた逍遙用の散策遊歩道。9）屋外水泳プール：広さは25m×25m。10）野鳥の森：バードウォッチングができる。11）多目的グラウンド等々，である。しかしながら，この恵まれた沼田キャンパスにおける，広島工大のオリ・ゼミも平成元年の実施20年経過を1区切りとして，平成2年の春から，その場所を「船上」に移して行われることになった。

Ⅱ－2．全国初の「船上オリ・ゼミ」の実施

さて，20年間にわたって毎年同じ施設でオリ・ゼミが行われてきた結果，一種のマンネリ化も生じ，企画・参加する教職員の間からも画期的なオリ・ゼミの開催を要望する声が多く出始めた。そこで，いろいろ検討した結果，大学の立地条件を生かして瀬戸内海の多島美を満喫しながら周航して行う「洋上オリ・ゼミ」の構想が全学で支持されて，これを実施することになった。チャーターした船は，オリ・ゼミ参加予定人員が約1300人余りに対して定員794人であったので，新入学生全員を，「前班」と「後班」の2グループに分けた。この2グループは，それぞれ1日半をかけて瀬

戸内海を周遊し，合計3日間のスケジュールで行われた。前年度までの沼田キャンパスでのオリ・ゼミは，施設の宿泊人数の関係で8グループに分けて行われていたので，新入学生全員に対する全スケジュールを終了するのに2週間近くかかっていたのに比べると，実施効率上，飛躍的な改善であった。

さて，そのオリ・ゼミの内容であるが，まず，船上でのイベントとして，オープニング・セレモニーから始まり，次に全体会として，外来の招待講師による「講演会」が行われた。それから各学科ごとに分かれてメイン行事の「学科会」が開催された。その主な内容は，1）学科主任教授の挨拶　2）教職員の紹介　3）スライド等を使っての学科内容の紹介ならびに説明　4）チューター（担任教員）とフェロー（先輩指導学生）を囲んでのフリートーキング　5）学生による「学科会」の説明　6）学内講師によるミニ講演会，等々である。

それから，沼田キャンパスにおける各種球技試合やキャンプファイアーの替わりに，教職員と学生との親睦を深めるために「カラオケ大会」が行われ，バンド演奏・ディスココーナーも設けられた。教職員ならびに学生たちからも好評で，また，楽しみだったのは，デッキランチと夕食のディナーであった。豪華客船での豪華な御馳走に，参加者たちは皆，舌鼓を打ちながら満足感を味わっていた。

従来からオリ・ゼミ実施終了後，毎回アンケート調査を行い，次回のオリ・ゼミへの反省資料としていたが，アンケート調査の回答によれば，船上オリ・ゼミは，学生諸君には概ね好評であったし，また，全国的にも珍しいことから，神戸新聞や中国新聞にもニュースとして掲載されて話題になった。

Ⅱ－3．全学一元的オリ・ゼミから各学科別のオリ・ゼミへ

従来のオリ・ゼミ実施費用の約3倍以上もかけて3年間にわたって実施した船上オリ・ゼミが，好評のうちに予定通り終了し，平成5年度からは，2学部6学科が学科単位で独自のオリ・ゼミ実施方針を打ち出し，実行に移されることになった。これで，広島工大の伝統的な全学一元的オリ・ゼミは終焉したわけだが，後述するように，実はこの背景には，動き始めた広島工大の大学改革が大きく関わっている。

ともあれ，現在は，オリ・ゼミの実施場所や実施時期，さらにはその内容や方法も各学科毎に独自に行われ，今や大いに多様化している。たとえば，学科の規模に応じて実施場所や利用施設の選定もバラエティーに富み，従来の広島工大沼田キャンパスの他にも次のような施設が使われている。1）大久野島国民休暇村，2）グリーンピア安浦，3）元 CUNY キャンパス施設を改造した千代田パークホテル，それから4）福山市近郊の「みろくの里」等々。なお，建設工学科のみは，従来の宿泊オリ・ゼミから日帰りオリ・ゼミに切り換えて，「倉敷美観地区ならびに瀬戸大橋」あるいは「温井ダムと西風新都」の見学をメインにして，その往き帰りのバスの中で，従来の行事である「学科紹介」や「チューター会」あるいはフリートーキングを行う方式を採用している。アンケート調査の回答結果によれば，このやり方もオリ・ゼミに参加した新入学生たちの好評を勝ち得ているようだ。広島工大におけるオリ・ゼミは，全学の行事として当然ながら学年暦に組み込まれてい

表１　参加状況

部	学　　科	新入生	欠席者	指導・協力	協力泊無	教職員等	参加合計
工学	電子工学科	139	4	36	0	22	193
		出席率	97.1%	※内10名は予算対象外			
	電気工学科	135	8	16	0	16	159
		出席率	94.1%				
	機械工学科	206	15	35	25	38	289
		出席率	92.7%	※内24名は予算対象外			
	建設工学科	193	18	34	0	23	232
		出席率	90.7%	※内１名は予算対象外			
	経営工学科	114	3	31	0	18	160
		出席率	97.4%	※内５名は予算対象外			
環境学	環境デザイン学科	221	6	35	0	33	283
		出席率	97.3%				
合　　計		1,008	54	187	25	150	1,316
		出席率	94.6%	※内40名は予算対象外			

Ｈ９.４.５現在新入生数（学務部調べ）

るが，新入学生の参加率は，これまで全学科平均で90%以上を維持しており，平成９年度の参加状況を示すと，表１の通りである。

Ⅲ．カリキュラム改革と「総合ゼミナール」科目の新設

Ⅲ－１．カリキュラム改革の背景

1991年の７月に改訂大学設置基準が発効して以来，日本の大学教育に関わる改革ないし改善の動きは急速に進んでいる。たとえば，1997年10月の文部省高等教育局大学課の調査によれば，1996年度までにカリキュラム改革を実施したのは，全体の90%以上の475大学に及んでいる。

日本の大学改革の加速化を促進する要因の１つは，周知の通り，18歳人口の急減化傾向であり，1992年に205万人とピークに達した後，急激に減少して2000年には151万人まで落ち込み，単純に大学数と受験者数との関係で言えば，全員入学可能な時代が到来することになる。そして，人気のある，魅力的な大学に受験生が集中する一方で，人気のない大学では定員割れが懸念され，定員の確保が最大の関心事となっている。要するに，日本の大学も今後は良質の大学のみ存続しうる自由市場時代に突入し，大学間競争に晒されることになるのである。上記の文部省調査によれば，カリキュラム改革の内容は，１）科目区分の見直し（445大学），２）必修・選択科目の見直し（444大学），３）卒業に必要な単位数の見直し（342大学），４）単位カウントの方法の見直し（313大学），５）

楔形カリキュラム採用（295大学）等々，実に多方面にわたっている。

Ⅲ－2．広島工大における教育改革の動向

さて，先に全国の大学改革の進捗状況について言及したが，広島工大においても大規模な諸々の改革が断行された。これらについて概述するならば，1）学部の新設：単科大学から理系の総合大学を目指して，1993年4月に環境学部を新設し，環境デザイン学科（定員180名）をスタートさせた。来年度（'99年度）から環境情報学科が新設される予定である。当学部では新設初年度の新入学生の約30%強を女子が占め，それ以後も女子学生の入学者は多く，圧倒的に男子学生が多かった従来のキャンパス風景が一変した。

2）入試方法の多様化：大別すれば，一般選抜入試と特別選抜入試の2本立てであるが，前者は，①前期，②後期，それに③入試センター入試の3種類が含まれる。また，後者には，①指定校推薦入試　②学園内推薦入試　③社会人特別入試　④帰国子女特別入試　⑤自己推薦入試が含まれている。なお，他大学や専門学校からの編入学制度（認定単位数により，2年次または3年次への編入が認められる）も定着している。

3）広島工大白書の定期的な刊行：「大学協議会」の主導の下に，1994年4月に「広島工大自己点検・自己評価委員会」が設置された。ここで十分な論議を尽くしてから，建学の精神に則して自己点検・評価活動が開始された。その最初の成果は，1995年4月に『広島工業大学白書』（全229頁）として刊行され，また，第2回目の白書は，1998年3月に刊行された。そして，今後とも2～3年毎に継続的に白書をまとめ，公刊する予定で自己点検・評価活動を行っている。なお，教育職員の教育研究業績は，『白書別冊』（全74頁）として1996年11月に発行され，学外からの反響が大きかったことに鑑み，これも継続して1～2年ごとに公刊することになった。

4）工学部の教員組織の変更とカリキュラムの改正：一般教育と基礎教育を担当する教員組織が解消され，学科の再編成がおこなわれた。カリキュラムの改訂について述べると，広島工大ではカリキュラムを5年ごとに見直すことになっており，1992年度がちょうどその見直しの時期に当たっていた。折しも大学設置基準が大綱化され，大幅に緩和されたので，全学を挙げてカリキュラム改訂に取り組んだ。1993年4月から実施された，新しいカリキュラムの主要な特徴は，以下の通りである。

第1に，各学科の共通科目（旧一般教育科目）を除いて，すべて各学科ごとに独自のカリキュラムが編成されたことである。第2に，選択科目を増やして必修科目をできるだけ少なくし，学生に主体的な選択の幅を拡大したことである。第3に，開講科目名を抽象的な学問名を廃止して，できるだけ内容を表示した具体的な名称に改めたことである。第4に，卒業に必要な単位数を従来よりも減らして124単位にし，学生の主体的な学習を促し，また，ゆとりを持たせるようにしたことである。第5の特徴として，各学科の全教員が担当する，「総合ゼミナール」という新入学生対象の必修科目（半期2単位）が新設されたことである。これは「新カリキュラムの目玉」とされる，これまでになかったユニークな科目であり，以下に詳述することにしよう。

Ⅳ.「総合ゼミナール」の実施とその経過――“SPS”から“SD”へ

Ⅳ－1.「総合ゼミナール」の主旨

先述したオリエンテーション・セミナーは，アメリカ流の“SPS”すなわち「学生への助言」ないし「厚生補導」の一環として行われる活動である。“SPS”の理念は，あくまでも側面から学生生活を援助・支援するものであり，広義の教育活動として位置づけられる。日本の大学が，M. トロウの言うマス化時代に突入して以降，学生を大学の主体的，自律的な成員として育成するために，重要な役割を果たしてきた。

しかしながら，日本の高等教育も成熟化し，高校卒業後の進学率も高まり，ユニバーサル・アクセス化している時代においては，“SPS”から1歩進んで「教育的な配慮」を前面に掲げる“SD”の理念を導入すべき状況になっている。ここで，“SD”とは，大学4年間を通じて学生がどのように成長するかに配慮し，大学教育の全体を通じて，すなわち正課教育ならびに正課外教育を通じて積極的に学生の成長を援助・促進することである。

先述したように，現代日本の大学にはいわゆる不本意入学者や無目的入学者が相当数在籍しており，“スチューデント・アパシー”現象が指摘されて久しい。アパシー学生に対して，大学における新たな目標を確立させ，学習の動機付けを行うのも大学教育の守備範囲である，という大学教師側の意識改革が必要になってきている。これは，大学全入時代における大学への必然的な社会的要請である。高度な専門職業人の養成を目指したフンボルト的な大学理念を脱却して，今やオルテガ・イ・ガセット的大学理念への移行が必要なのである。すなわち，もっと普通の社会人，職業人として学生を育成すること，つまり「平均人」を教養ある市民，よき職業人になるように教育することが，「大学の使命」であり，大学の教職員の責務なのである。

ところで，広島工大の全学科に共通している「総合ゼミナール」（フレッシュマン・セミナー）科目のねらいは，それぞれの学科に入学してきた学生の定着率を高め，学生の満足度を向上させ，4年間の大学生活を通じて彼らが大いに成長することができるように指導することである。具体的に言うと，1）約10人前後の少人数授業を通じて，2）教員と学生が親密に接し，3）各学年の学習内容をそれぞれの担当教員がわかりやすく説明し，4）学習方法についても触れ，5）大学4年間の勉学ならびに生活の指針を与えることによって，6）学生生活を充実して過ごさせ，実りあるものとなるように，そして7）3～4年後の就職活動へ向けての心がまえのために，しっかりした職業観を形成することができるように指導することである。

Ⅳ－2.「総合ゼミナール」の実施と今後の課題

さて，筆者が機械工学科に所属している関係で，以下においては主として当学科における「総合ゼミ」の実施について述べることにする。この科目も学科主導で行われるので，各学科ごとに実施の方法もさまざまである。

機械工学科の学生定員230名を2つのグループに分割し，それをさらに10班以上に分ける。視聴覚設備の付いた新設の「総合ゼミ」専用の教室数の制約から，週2日の時間割を組み，両グループ

週1回使用することができるように調整した。授業実施日程について述べると，1回目と2回目は「総合ガイダンス」として，選出された4名の「総合ゼミ」係の教員が班分けおよびスケジュールならびに受講心得や当科目の主旨説明を行う。6回目と10回目は，学科の就職委員会による「就職ガイダンス」に当てられ，15回目は，総括と「総合ゼミ」についてのアンケート調査を行う。以上は，グループ単位で行われるが，その他は班単位の受講であり，各担当教員が行う。つまり，各担当教員は，5班に対して各2回ずつこの科目を担当することになる。この「総合ゼミ」実施の結果について，最近3年間の学生へのアンケート調査の回答を集計したものを以下に示すと，図1のとおりである。

この回答結果について簡単にコメントしておきたい。第1に，「設問2のA」が年度を追うごとに数値が大きくなっていること，つまり「総合ゼミ」を受講して機械工学科にたいへん興味をもつようになった学生が増加していること，また，H.9年度の「設問2のC」の数値が小さくなっていることは，「総合ゼミ」実施における創意工夫と改善の結果とみなしてよいだろう。

半面，「設問2のC」の数値が，H.6年度からH.9年度までそれぞれ10%，8%，7%と徐々に減少しているとは言え，自分の所属する機械工学科の学習にまったく興味を持てない学生が存在している事実を踏まえて，今後，彼らに対する学習の動機付け等の面で，特別の指導が必要であると思われる。

第2に，「機械工学科に入学したことを後悔している，その他」の回答者が3年度にわたって全体の1割から2割近くもいるということは，これも大きな問題である。もし彼らが機械工学科目の学習意欲が弱く，規定の単位を取得できずに留年者予備軍になる可能性が高いとすれば，彼らの学習の動機付けや，早期の転科・転学部等の進路変更に関して，カウンセリングを行う必要があるだろう。

V．人間形成空間としてのキャンパス

V－1．現代の大学生の実態

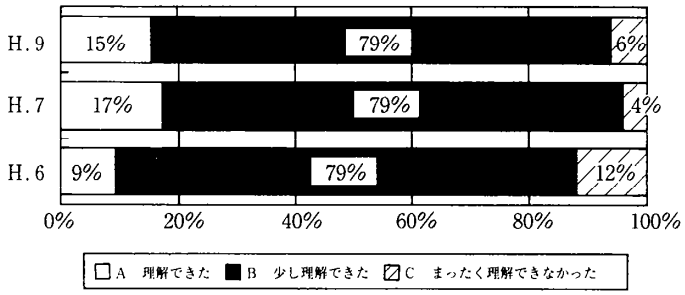
教室における学生の消極的な学習態度は，これまでにも少なからぬ大学人によって指摘されているが，端的にまず，そのような消極的学習態度は，学生の座席の取り方[8]に示されている。つまり，大学の教室は往々にして教壇から遠い所，教室の後方部と左右両端から順々に座席が占められ，前列や中央の座席はがら空き状態といった，教室の空洞化現象も稀ではない。

さらにまた，特定の大学ではなく全国の大学で広範に見られ一般化しているのは，学生の「私語」の問題である。「私語」の多発化は，もはや授業が成立しない程進行し，教育学の研究対象にすらなっているのが現状[9]である。私語の発生が教師側に原因があるのか学生側にあるのか，あるいは両者共にその責めを負うべきなのか，われわれにとって正確な事実の把握がまず必要である。「どんな教師の授業で私語が発生したか」を自由記述式でアンケート調査した結果[10]判明したことは，教師側の問題に属するものとして，1）授業内容に関するもの，2）集団過程に関するもの，3）教育技術に関するもの，そして学生側の問題に属するものとして4）受講動機に関するものが，授

図１　最近３年間の総合ゼミナールアンケート集計結果

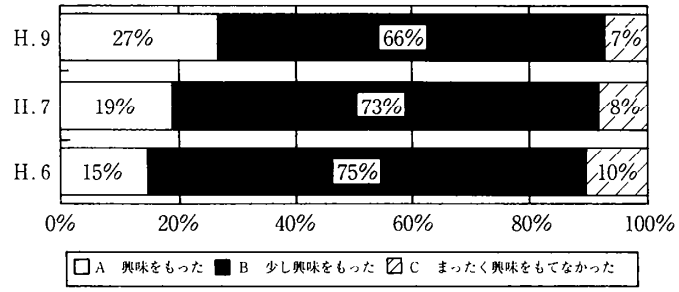
設問１．機械工学科の各分野について，それぞれを概念的に理解することができましたか。

	H.6	H.7	H.9
A　理解できた	9%	17%	15%
B　少し理解できた	79%	79%	79%
C　まったく理解できなかった	12%	4%	6%



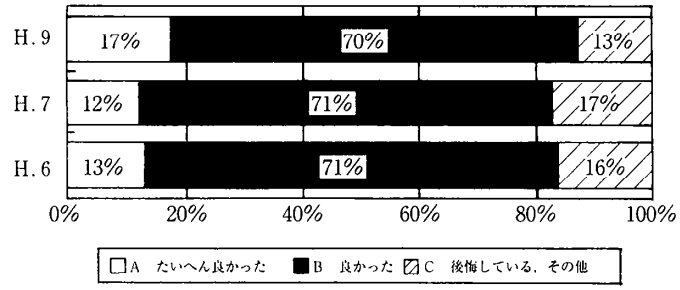
設問２．総合ゼミナールを通して機械工学科に興味をもちましたか。

	H.6	H.7	H.9
A　興味をもった	15%	19%	27%
B　少し興味をもった	75%	73%	66%
C　まったく興味をもてなかった	10%	8%	7%



設問３．機械工学科に入学して良かったと思いますか。

	H.6	H.7	H.9
A　たいへん良かった	13%	12%	17%
B　良かった	71%	71%	70%
C　後悔している，その他	16%	17%	13%



業中の私語の発生の4大要因となっている。

次に，われわれは，学生（若者）一般の幼稚化現象の問題にも言及しておかなければならない。現代の若者が大人になりきれず，かつ，大人になるのを拒否する若者の増加が最近よく指摘される。たとえば，激烈な受験戦争がもたらした問題状況として，「大学生は自由になったとたんに自分の未熟さにも気づかされる。幼い頃から持ち越してきたコンプレックスや発達課題，価値観，対人関係の歪みなどを見直し，壊し，修正し，そして自分のものとして再編成するときに出会うのである。」[11] つまり，現代日本の大学生は，一般に身体的には大人になっても精神的に未熟なままで，大人の行動が取れないのである。

幼少期から大学進学に焦点づけられた生活を過ごし，受験勉強以外に何らの経験もせずに大学に入学してくる学生たちは，不幸にも人間としての成長に不可欠な「反抗」や「遊び」や「冒険」を経験する機会がなかったのである。言わば，彼らにとって幼少時代からの発達的課題のつけが，全部大学入学後に持ち越されてきているということである。

このような状況について，大礒教授は，その著書の中で興味深い言い回しをしている。現代日本の受験戦争を突破して，4月に大学に入学してくる新入生たちを，彼は「大学ボロット」と呼ぶ。受験戦争プログラムに組み込まれた受験生が「受験ロボット」としてひたすら勉強させられ，大学入試に合格すると，その時点で戦闘プログラムが「消失・蒸発」してしまう。その結果，「プログラムを持たないロボット」は，「単なるボロット」にしか過ぎなくなるというのである[12]。

「受験生」とは，「真人間」としてのプログラムをすべて消去され，戦闘ロボットに変えられた者の別名であり，受験生から大学生になった状態は，戦闘ロボットがその組み込まれた受験プログラムを消されてしまった「ボロット」つまり主体性のない人間の脱け殻の状態になってしまうことを意味している。ここで重大なのは，戦闘プログラムによって受験生の真人間としての基本ソフトが破壊されてしまうということである。さらに問題なのは，大学新人生の多くが受験戦争の勝利者としてではなく，第2志望大学以下への不本意入学者であり，受験敗残兵の如き状態のコンプレックスを持って入学してくるということ，つまり，現実に受験戦争の勝利者は，一握りのごく少数者であるという事実である。「ボロット学生」が群れをなしているこのようなキャンパスの実態を踏まえるならば，大学の教師たるもの，学生の人間性回復ないし人間形成のためにできる限りの尽力と教育的配慮・指導を行う努力をしなければならないのである。

V－2．クラブ・サークル活動と人間形成論

そこで，以下において人間形成の観点から学生の課外活動について論及してみよう。課外活動，たとえば，さまざまなボランティア活動やアルバイトあるいはインターンシップ的な活動についての言及は別の機会に譲って，ここでは主としてクラブ・サークルないし同好会活動としての「課外活動」に限定したい。

それではまず，学生がクラブ・サークル活動から得られるものは何か，あるいは学生がそれらの活動に期待するものは一体何か。この問いに対して一般的に考えられる答えは，1）同好の友人，先輩との交わりや連帯的な人間関係　2）自己の興味・関心の実行と充足　3）正課の勉強からは

得られない技能や知識の獲得　4）体力の強化ないし健康の増進　5）協調精神，責任感，主体的行動，忍耐心，礼儀，他者への配慮心　6）リーダーシップの涵養　7）メリハリのある充実したカレッジライフ　8）自己理解の契機　9）自治意識の涵養　10）在籍大学への帰属意識，等々が挙げられよう。

もし学生が正課としての学業と課外のクラブ・サークル活動とをバランスよく両立させることができるならば，両者はともに青年後期の大学生にとって，自らの人間的成長の重要な契機となりうるであろう。このような観点から，大学が学生の課外活動を積極的に援助・指導していくという課外活動の在り方は，今後ますます重要になってくるだろう。そこで，次に広島工大の事例を手がかりにして，クラブ・サークル活動の現状と問題点について言及してみたい。1998年２月現在，運動系の「体育会」と文化系の「文化局」に登録されている学生数は，合計1221名で，学生総数4048名で割ると，クラブ加入率は30.2%である。因みに前年のそれは，32.4%であるが[13]，それでもクラブ加入率は３人に１人にも達しないのである。

かつて広島工大生のクラブ加入率は50%を超えていたのであるが，徐々にそれが減少し，数年前からとくに運動系のクラブ・サークル加入学生が急減している。こうした傾向は，国立の広島大学においても見られ，アメリカンフットボール部やフェンシング部等の「新人勧誘苦戦，広大の体育会」と題して新聞でも報道されている[14]。また，上智大学の場合も，かつてクラブ加入率は約70%台を維持していたのが，1996年度に64.2%に低下し，1997年度には57.4%にまで落ち込んでいると報告されている[15]。どうも現代日本の学生のクラブ加入率の低減化は，一般的傾向でもあるようである。

こうした課外活動離れの事情を踏まえて，広島工大がクラブ・サークル活動支援のために，どのような対策を行っているか，簡単に述べておく。広島工大では，毎年３月半ば頃に「学外監督・コーチ・顧問・部長懇談会ならびに親睦会」を恒例として開催している。筆者も10数年前に運動系クラブの部長に就任して以来，ほとんど毎回にわたってこの懇談会に出席してきた。まず学務部が作成した資料に基づいて，１）当該年度のクラブ・サークル活動の報告　２）クラブ助成金支出状況それから　３）事故保険金支払い状況等について報告，説明を行い，引き続いて出席者との活発な質疑応答がなされる。その際，部長（体育系クラブ・サークルの担当教員）ならびに顧問（文化系クラブ担当教員）からも，活動状況の報告や直面しているさまざまな問題が指摘され，次年度の課外活動の改善のために活発な討議が行われる。それを受けて大学執行部側では学務部が中心となって改善策を検討し，実行に移すことになるわけだが，とくに，１）部室の整備　２）新入部員の勧誘の機会と勧誘場所の提供　３）クラブ活動助成金の増額等について，広島工大の方針として積極的に支援し取り組んでいる状況である。

結語――今後の課題

大学の大衆化と入試の多様化の進行に伴って，大学生の多様化が加速的に進み，今や大学教員の在り方もそれへの対応と変革を迫られている。大学生の多様化の中身として，第１に，学力の大き

なばらつきが顕著化している。推薦入試や一芸一能入試がこれの1つの背景要因になっているものと推察される。大学教師は，学生の学力の低下を徒らに嘆き，学生を否定的に捉える態度を取るよりむしろ積極的な教育実践のために，現今の学生の多様化を前提にした新しい教授＝学習法[16]を模索し，確立することこそ志向すべきであろう。第2に，大学入学の明確な目的意識を持たない学生や，学習の動機も薄弱な学生が増加しているし，また，全国の大半の国公私立の大学には，第一志望の他大学に合格できなかったために不本意に入学した学生も多数在籍している。

さて，こうした現状を踏まえて，これからの大学にとって重要なことは，かつてのような“SPS”活動としての側面からの援助による大学への適応を超えて，全学をあげて積極的に学生の資質開発や人間的成長を促進する“SD”活動に取り組むことであろう。本稿では，広島工大において学年暦に組みこまれた「オリエンテーション・セミナー」と正規のカリキュラムの中に必修科目として位置づけられている「総合ゼミナール」を事例として，導入教育の在り方について論述し，さらに，クラブ・サークル活動の意義について考察した。最後に付言しておきたい。大学希望者全入時代の到来が近づきつつある中で，有効な大学教育実践のために，個々の大学教師の意識変革がますます重要であるということである。つまり，大学教師は単なる研究者，学者であるだけでなく，学生にとって良き教育者たらねばならないのである。

【注】

1）加澤恒雄「大学教育における“SPS”の重要性について―とくにフレッシュマン・オリエンテーションに関する一考察―」『一般教育学会誌』第8巻第2号，1986年11月.

2）cf. 江原武一『現代高等教育の構造』東大出版会，1984年，20–24頁。なお，江原氏は，「高等教育在学率」を算出するに当たって，高等教育機関在学者を大学学部，短大本科，国立工業教員養成所，国立養護教諭養成所，高専の第4・5学年に在籍している者に限定しているので，もしこれに専修学校や各種専門学校の生徒を含めて算出するならば，その在学率はさらに大きなものになるだろう。

3）たとえば，笠原嘉『アパシー・シンドローム―高学歴社会の青年心理―』岩波書店，1984年などを参照されたい。

4）Jay Carrol Knode: Orienting the Student in College, New York, 1972, pp. 12–14.

5）日本の大学におけるフレッシュマン・オリエンテーションの実施経過については，文部省大学局学生課編『厚生補導』（第一法規出版）の創刊号（1966年発刊）から第195号までを参照した。

6）J.C. Knode, ibid, p. 9.

7）ここの記述は，学校法人鶴学園『広島工業大学沼田校舎　しおり』（1998年度）に拠っている。

8）教室における大学生の座席の取り方と受講態度について観察した，興味深い報告として，武内清「大学生の意識と生活」牟田博光編著『高等教育論』放送大学教育振興会，1993年があるので参照されたい。

9）cf. 新堀通也『私語研究序説―現代教育への警鐘―』玉川大学出版部，1992年。本書は，私語

の問題が一過性的な現象ではなくて，現代教育の根幹に関わる本質的な問題であることを論証し，大学教育関係者に対して鋭い警告を発している。

10) このアンケート調査の結果は，島田博司「授業中の私語」片岡徳雄，喜多村和之共編『大学授業の研究』玉川大学出版部，1989年，260–261頁で報告されている。

11) 東山弘子「キャンパス・チェンジズの試み」『発達カウンセリング』(現代のエスプリ No. 295)，至文堂，1992年，78頁。

12) 大礒正義『「大学」は，ご臨終』徳間書店，1996年，24–29頁。

13) ここの記述は，主として『広島工業大学，平成9年度学外監督・コーチ・顧問・部長懇談会』における配付資料に基づいているが，過去10数年にわたる同懇談会の資料も通覧し参照した。

14) 中国新聞，1997年5月12日付夕刊。

15) 神戸大学・大学教育研究センター　平成9年度　研究集会『キャンパス・ライフ再考』(平成9年10月24日）において行われた，上智大学副学長の小林順治氏の講演「クラブ・サークルの意義について」の際に，上智大学の学生のクラブ加入率についての報告がなされた。

16) 大学における新しい教授＝学習法について，筆者は，以下の論文で論じてあるので参照されたい。

①「教授＝学習法の研究—学生理解の方法論について—」『私学研修』第216号，私学研修福祉会，1992年7月。

②「大学生の学習理論開発の必要性—大学でいかに学ぶか—」『大学進学研究』No. 88，大学進学研究会，1994年7月。

③「シラバスの作成と大学における教授法の改善」『FD に関する総合的研究報告書』放送教育開発センター，1996年3月。

〈付記〉

本稿は，東京都立大学を会場にして開催された第54回日本教育学会大会（1995年8月25日～27日）の初日に，高等教育部門で口頭発表した原稿に，その後の資料を加味して補筆・修正したものであることをお断りしておく。

On the Significance of Freshman Introductory Education, Facing Diversification of College Students in Japan Today

——Research on Student Development along with Student Personnel Services——

Tsuneo KAZAWA*

Since 1966, higher education in Japan has surpassed the "elite" stage and has reached the "mass" stage, to use terms coined by Martin A.Trow. Currently it is reaching the "universal-access" stage, according to Trow's phaseology. The most conspicuous characteristic at this stage in higher education is the diversification of college students.

As for the diversification of students, for example, there are 1) a great many negative apathetic students who are unwilling to study, 2) students who have not their own clear learning goal, and 3) students who failed entrance examination at another upper-level colleges and registered unwillingly at their present college or university.

Consequently, it has become more and more important to show how to teach such college students and give them any motivations to study. In order to support such students, "SPS" (Student Personnel Services), and Freshman Orientation (FO) has become necessary and has become more and more significant.

It has been stated that the origin of "SPS" and "FO", one of introductory educational methods, is the American college and university. According to Jay Carroll Knode, a freshman orientation program was conducted for the first time at Boston University in 1888 and next at Iowa State University in 1900. And then such programs were also conducted at Stanford University and at Michigan University in 1911. American colleges and universities, therefore, have had a history of freshman orientation program for 110 years. Japanese colleges and universities, on the other hand, have conducted the freshman orientation program only for the past 40 years.

In Japan, the first time freshman orientation was conducted was at Kyushu University in 1961. It was conducted at Sophia University in 1966, and then it was conducted at Hiroshima Institute of Technology (HIT) in 1969 and nowadays is conducted at most Japanese colleges and universities. So, in this paper, I would like to report on the case of the freshman orientation program at HIT and discuss the following problems concerning the program:

* Professor, Hiroshima Institute of Technology

1) the "FO" at Numata Campus belonging to HIT

2) the "FO" on cruise ships, and

3) the existing "FO."

In Japan, colleges and universities innovation or reform has been actively pursued since 1991. According to the Ministry of Education, by the 1996 fiscal year, curriculum reforms had been implemented at over 80% of Japanese colleges and universities. This is due to the revised "Daigaku-Secchi-Kijun" deregulated college and university curriculum development. In the case of curriculum reform in HIT, I report on the "freshman seminar", that is to say, one of newly offered courses in our revised curriculum,and I would like to consider the significance of this course. It is a required subject for freshmen and one of its aims is student development (SD).

Finally, I discuss the significance of club activities outside the curriculum from viewpoint of personality development.

In conclusion, I emphasize that "SD" activities along with "SPS" will become more necessary and more important for colleges and universities in Japan.